

地域医療連携センターニュース



公立阿伎留医療センターは、医の心を重んじ、患者の生命と健康と生活の質を考える良質な医療を実践し、地域医療の最適化に努力します。

発行 地域医療連携センター

電話 042-558-0321(代表)

FAX 042-550-5190(直通)

令和5年のスタートにあたり

地域医療連携センター長（副院長） 樫田 光夫

皆様明けましておめでとうございます、それぞれに良き新年をお迎えのことと思います。

さて、昨年も新型コロナウイルス感染症の対応やワクチン接種により医師会、歯科医師会の先生方や福祉施設の皆様も大変なご苦勞をされたことと思います。

学会や研究会もほとんど WEB 形式で行われました。一方向でありディスカッションがあまり進まない感が否めません。

地域医療連携センターとの連携を深めるために毎年度開催していた恒例の情報交換会も残念ながら開催することはできませんでした。対面での再会が待たれます。

また、院内の状況を振り返ると、時期により新型コロナウイルス感染症患者の増減が繰り返され、研修医の教育が十分にできないこと、看護学生の病院実習の中断、職員が感染したことに伴うマンパワーの低下などの様々な問題が生じました。

一昨年と同様に歓送迎会の中止、昼食の孤食、院内の医局会、院外の先生をお招きする医局講演会などコミュニケーションを図る機会がない年が続いています。

しかし、特に欧米を中心とした地域では、ほぼコロナの影響による制限が撤廃されつつあります。日本でも第5類感染症に引き下げる議論も始まり、今年は状況が大きく変わる年になるかもしれません。

オミクロン対応のワクチン接種や新しい治療薬が使用可能になり、新型コロナウイルス感染症の治療法も少しずつ進歩してきています。それにより感染症が落ち着くかどうかはこれからの課題になります。今後はコロナ禍前の水準の診療体制に戻れるよう準備をしていきたいと思ひます。

今年も地域の先生方、介護福祉施設、訪問看護ステーション、地域包括支援センターの方々とも連携を推進し、新型コロナウイルス患者の対応を含め、当センターが地域に根付いた病院として飛躍できるよう頑張りますので、本年もよろしくお願い致します。



お産の現場では、ベイビーが生まれた直後から立ち会ったスタッフは、「元気に泣くか!?!」、「早く泣け! バタバタ動け!!」と気合を入れながら、羊水でぬれたベイビーの身体を拭きながら、時には酸素マスクや口腔内吸引を行います。その5~10分間はスタッフの目は大きく全開し、頭は湯気が立ち上るほどのフル回転です。分娩で胎児から新生児になった瞬間から「おギャー」と泣くことで肺呼吸が始まり、血液循環が「胎盤➡心臓」から「肺➡心臓」へとダイナミックに変化しますが、その変化への順応が不良な場面において心肺機能を手助けする手技が、新生児蘇生法 NCPR です。

呼吸不良による新生児仮死は予測困難であり、生命への危険性や後遺症のおそれもありますが、酸素マスクなどの人工呼吸法によって、その予後は劇的に改善することから、周産期施設に従事する医療職にとって、NCPR 手技の修得は大切です。

日本周産期・新生児医学会は、「分娩に立ち会う医療スタッフが新生児蘇生法の標準的な理論と技術を習熟する」ことを目的とした普及事業として NCPR 講習会を2007年から開始し、全国展開された講習会は、主に大規模な周産期施設や大学病院、他の各地で多数回開催され、年々参加者も増加してきました。

しかし、令和2年からのコロナ禍による行動規制のため講習会の規模と回数が半減し、施設外からの受講が厳しく制限されました。そのため院内の希望者が受講する機会がなくなり、しかも西多摩地区には開催できる医療機関がなかったため、参加可能な講習会を全国規模で探し回るといった絶望的な事態に陥りました。

令和3年になってもコロナ禍の収束が見通せないため、受講対策を模索していたところ、講習会の開催資格を持つインストラクター医師の好意で自施設での開催が可能になりました。初回開催は、同年5月に病院講堂で行い、以後、今年10月までの1年半で8回企画し、コロナウイルス感染拡大で3回中止になりましたが、5回の開催で院内外36人(医師11人、助産師8人、看護師17人)が受講しました。

ところで、3西病棟の夜勤帯の分娩では、夜勤者は分娩室介助のため病棟に不在になり、その間は管理当直(師長、主任クラス)が無人の病棟に待機する勤務体制です。

さらに、新生児室が病棟内にあるため、一人で新生児介助もする場面も想定され、夜勤管理者には大きな負担となっていました。その問題点を解消するべく、管理者ならびにこれから管理者になる看護師にも新生児蘇生法を修得してもらう機会として NCPR 講習会への参加を呼びかけました。

本来、NCPR講習会は周産期関連者を対象としていますが、他領域に従事する看護職にも参加を勧めることで、NCPR の認知度が広まると考えました。

院内普及への取り組みを企画した趣旨に病院から賛同を得て、施設の的にも、予算面でも力強い支援を受けたおかげで、他の講習会では参加費が一人1万円前後であるのに対して当センターでは個人負担ゼロを維持できました。

参加者の職種構成も、①医師＋②助産師で 19/36(52%)、③看護師が 17/36(47%)ですが、全国の職種構成平均は①＋②72%、③28% であり、当センターでは看護師受講の割合が大きいことが判明しました。この点から、院内普及の可能性と取り組み方の方向性が見えてきたのではないかと考えます。

上記の2つの背景からNCPR講習会を自治体病院主導で開催し、院内普及に取り組んでいる経緯をまとめ「新生児蘇生法 NCPR の院内普及への取り組みとその意義」という演題で、本年11月に沖縄で開催された「第60回全国自治体病院学会」で助産師の岩丸美奈さんが発表し、高い評価受け、西多摩地区の他施設からは多くの注目を集めました。

今後も、自施設開催のメリットを生かして、全国に例のない「NCPR の院内普及」のモデルケースとなるように、努力していきたいと思います。



当院産婦人科は、婦人科腫瘍専門医3人(常勤2人、非常勤1人)、生殖内分泌専門医(不妊)、女性ヘルス医学専門医(常勤 1 人、非常勤1人)、周産期・新生児専門医(母胎胎児)(非常勤1人)、産婦人科専門医7人(常勤4人、非常勤3人)の構成で外来、病棟診療を行っています。良性手術は、開腹、内視鏡下手術を行い、悪性腫瘍は、開腹手術を積極的に行っています。

MRIが初診当日でも撮影、読影が可能なため、診断治療に遅滞なく、手術も初診から2～4週で予定を組んでいます。

当科の梶田(スギタ)を中心に、骨盤臓器脱(子宮脱、膀胱脱)の内視鏡(LSC 仙骨腔固定術)も積極的に行っています。

卵巣奇形腫なども抗 NMDA 受容体脳炎の可能性も考慮して積極的に手術を行っていますので、症例があれば遠慮なくご紹介いただきたく存じます。

今後ともよろしくお願いたします。

地域医療連携センターからのお知らせ

昨年はコロナ禍による影響や常勤医師の減少等の理由により、紹介患者さんのご予約をご希望通りお取りすることができないケースが多くご迷惑をおかけしました。

本年はコロナ禍以前の状況に戻せるよう少しずつできることから取り組んでまいります。

- ① 患者さんをご紹介いただくにあたり、**受診日より2週間前までに、37.1℃以上の発熱があった方については、一般外来を受診する前に、発熱外来にてコロナ NEAR 法を実施しております。**
これは時間指定となりますので、事前に地域医療連携センターまでご連絡ください。

患者さんまたはご家族に現在までの症状や、コロナワクチン接種状況、周囲の感染状況、来院方法等の問診を取らせていただきます。

現在発熱外来が大変混みあっている状況です。

事前連絡なくご来院し、発熱が確認された場合で、緊急性がない方は受診を改めて別の日にご案内させていただくこともありますので、ご注意ください。

地域の先生方にお手数をおかけしますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

- ② あきる野市、日の出町、檜原村医師会の先生方を対象に新型コロナウイルス感染症入院相談ホットラインを設置し、ご相談を承っております。重症患者さんと軽症患者さんでも認知症などで徘徊等により、スタッフの対応が困難な方は、申し訳ございませんが、お受け入れできません。

080-4854-6078（平日 8:30~17:15）

※ 夜間・休日は管理日当直が対応します。詳細については、昨年7月に発行した「公立阿伎留医療センターだより」に記載されています。再送付ご希望の方は地域医療連携センターまでご連絡ください。

- ③ 昨年6月より画像診断予約（CT・MRI・骨塩定量検査・歯科のセファロ撮影など）については、直通電話を設置し、ダイレクトに対応できるように致しましたので引き続きご利用ください。

042(559)7456（直通電話） 042(558)0571（直通FAX）